

2025 年度 アクティブ・スチューデント応援奨学金 活動報告書

国際経営学部 国際経営学科 2 年

一圓 梨亜

はじめに

この度は、2025 年度アクティブ・スチューデント応援奨学生に採用していただき、誠にありがとうございました。私の本活動目的は国際経営学部のポリシーでもある「世界を動かす人」として成長するための糧にすることである。今回、この奨学金の支援を受けて、「ヤングリーダー版ダボス会議」とも呼ばれている Harvard Project for Asian and International Relations（通称 HPAIR）に参加した。HPAIR はハーバード大学が主催する世界最大規模の国際会議の一つであり、世界中から選抜された優秀な学生やヤングリーダーが集まり、社会問題について議論し理解を深める場である。本活動に参加したきっかけは、2025 年 8 月に 11 年ぶりに東京でアジア会議が開催され、参加したことである。そこで、自分の視野の狭さの認識や課題意識の強まり、ケースコンペティションのくやしさが契機となり、ハーバード大学でさらに学びを深め、再挑戦したいと考え今回の活動を決意した。本会議は、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ハーバード大学で「Hope at dawn, Truth at Dusk」というテーマを基に 3 日間にわたり開催された。以下はその報告である。

実際の会議の様子

会議 1 日目（2 月 6 日）は、オープニングセレモニーから始まった。登壇者に、ラジオフリーアジアの CEO 兼社長の Bay Fang 氏と Berkman Klienn Center for Internet and Society の常務取締役 Alex Pascal 氏が登壇した。本セッションでは、二人のキャリアや活動、経験から得たこと、私たちに向けたメッセージが語られた。Bay Fang 氏はハーバード大学卒業後ジャーナリストとしてキャリアをスタートし、その後米国国務省でキャリアを積み、そして再びジャーナリストへと戻った。彼女は、報道には人々の認識や考えを変える力があり、社会には報道が必要不可欠であると自身のパンデミックや新疆ウイグル問題の取材経験を例に挙げて情報の大切さを強調した。一方で、Alex Pascal 氏も米国国務省やホワイトハウスでキャリアを積んだ経験から政策作成の立場で彼の考えを語った。彼は、政策立案について述べ、「政策の先には必ず人がいて、人の人生に直結するものであり、実際に影響を受ける人に会うことを通してそれを実感する」と人と向き合うことの重要性を強調した。また彼も、Bay Fang 氏の話を受け、政策を作るうえで情報は必要不可欠な存在であったことも述べ、情報がもたらす影響についても言及していた。両者ともに、アルゴリズムやフェイクニュースにより人それぞれが違う現実を見ることに繋がっていると述

べ、その結果社会の分断や不信が起こっていると、改めて情報の取捨選択、情報の流れを変えるべきであり、外から批判しているだけでなく、内側から変えることの重要性を訴えた。彼らの経験から、リスクをとって挑戦すること、人と繋がることを積極的に行い自分の声を、人の声を大事にすることを学んだ。実際にボストンまで足を運び、新しい人と繋がり、対面の会議に参加したからこそ、この両者の話を聞くことができ、真の情報にたどり着くことができたと実際に実感することができた。スピーカーセッション後には夕食の時間が設けられ、参加者同士のネットワーキングが行われた。その後、有志による文化紹介の時間があり、各国のダンスや歌、演奏が披露されるなど、異文化への理解を深める貴重な機会となった。

左上：Bay Fang 氏と Alex Pascal 氏のスピーカーセッションの様子

右上：参加者との写真

左下：参加者と親睦を深めている様子

右下：オープニングセレモニー前の同テーブルの参加者たち



会議最終日（2月8日）も、朝9時からスピーカーセッションが始まった。Nila Ibrahimi氏が登壇し、アフガニスタンでの経験を語った。Nila氏は、ユースアクティビストとして、難民や若者、特にアフガニスタンの女性の声を取り上げ、国際社会に届ける活動を行っている。彼女は、アフガニスタンの女性の人権は、たびたび世界的にも問題となり取り上げられるが、すぐに人々の関心が薄れてしまう現状に触れ、継続的に関心を持ち続けることの重要性を述べた。さらに彼女は、支援の在り方についても考えを明らかにし、「外部から一方的に価値観を押し付けるのではなく、相手の背景や文化を理解し、対話を通して一個人のストーリーを直接聞くこと、そしてともに考える姿勢が必要である」と述べた。最後には、私たちに対して、常に好奇心を持って挑戦すること、他社に共感し続けることの重要性を伝えた。私は、現在のアルバイトで支援する立場にいることからこそ、支援する姿勢について改めて理解を深めることができた。さらに世界の第一線で活躍している支援者の見解を聞くことができ、今後の自分の活動に生かせる経験ができ嬉しく思う。スピーカーセッション後は、いよいよインパクトチャレンジが始まった。結果は、残念ながら最優秀には選出されなかった。しかし、ここで経験し学び得た、知見やチームワーク、ノウハウ、議論は間違いなく今後の糧となり、自分を成長させたものとなったと強く実感した。最後に、クロージングセレモニーが開かれた。クロージングセレモニーでは、元アメリカ国務省の報道官 Ned Price 氏が登壇した。個人的に一番印象に残ったスピーカーセッションであった。Ned氏は、冒頭で世界中から若者が集まり、時間や距離を超えて、より良い社会を作ろうと議論しているこの会議こそに大きな価値があると述べた。国際協力の希望は若者の行動そのものにあると強調し、私たちの参加者に今後の展望を強く訴えかけた。彼の話の中で、他の講演者と同様に情報の在り方を述べ、情報の付き合い方や重要性を語った。また、アジア地域が世界人口の約半数、GDPの約60%を占めていることを述べ、アジア国の世界における重要性を強調した。インド太平洋には機会とリスクが共存する最重要地域であり、日本はその地域の秩序を支える中核的パートナーであると日本についての言及もされた。世界には様々な国が存在し、対立し合っているが、その当事者の問題だけでないことを強く訴え、グローバル課題であることを述べた。解決のカギとなるのは、信頼を築くことが最重要であること、情報環境の悪化によって社会の分断を加速させていると改めて情報の影響力を再提示した。だからこそ、その場に存在し、国際社会に参加し続けることが大事であると「存在」することの意義を強調した。そして存在している以上、社会に変革をもたらす機会はどこにでもあり、だれでもその主体になることができると述べた。その主体になるには、予想外の機会を受け入れ、機会に対してYESという姿勢が大事である、直線的ではないキャリアにこそ意味があり、意義があるとこの会議を締めくくった。彼の話を聞いて、また一つ視野が広がった。社会にある課題は、さまざまであり、それぞれが独立しているようにみえていた。しかし意外にも、そのカギを握っていたのは情報であったことに気づいた。また、世界を平和にすることができるのも情報なのかもしれないと考えさせられた時間であった。その情報に踊らされないた

めに、私たち若者は、積極的に対面で、人の声に耳を傾け、共感する姿勢を持ち、そこに存在することこそが、社会に変革をもたらすことができる一歩につながると学ぶことができた。

おわりに

私はこの奨学金制度を使って、世界中に社会に変革をもたらす仲間を作ることができ、世界で挑戦する機会を得ることができた。これまで留学経験がなく、日本国内で英語を学んできた自分にとって、すべて英語で行われる環境は大きな挑戦であった。しかし、その環境の中で英語を用いてコミュニケーションを取り、社会課題について議論に参加できたことは大きな自信につながった。また、参加者との交流を通じて、世界各国の若者がそれぞれの社会課題に対して強い関心を持ち、主体的に行動していることを知ることができた。日本では日常的にこうした議論を行う機会が少ないため、この環境は非常に新鮮であった。この経験を通じて、社会課題は一国にとどまるものではなく、国際的に共有されるべきものであることを実感した。今後は、今回得た視点やネットワークを活かし、より主体的に社会課題に関わっていきたい。

改めて、この活動を支援してくださった中央大学国際経営学部の教授や事務室の皆さんをはじめとするたくさんの方々に感謝を申し上げます。



Nila 氏との写真



左：NED PRICE 氏のスピーカーセッションの様子
右：参加者との写真



左：インパクトチャレンジの様子

HPAIR ホームページ：<https://www.hpair.org/>